

上三川 近代化の歩み

〜明治維新から戦前まで〜

明治時代の

近代化を支えた河川交通網

産業の近代化がいくら進んでも、原材料や商品を速やかに運ぶことができれば損害が生じてしまいます。経済活動が地球規模になった現在、飛行機や大型貨物船を使用し、世界各地から必要なものを必要な量だけ手に入れることができます。国内でも道路や鉄道の整備によって、日本中に安定して物を運ぶことが可能となり、経済が発展してきました。交通網の整備は、近代国家になる重要な要素の一つなのです。

江戸時代より、内陸部での大量輸送の主役は河川交通でした。東海道を初めとした街道も整備されていましたが、多くの荷物が運べる荷車での通行が禁じられ、馬と人による輸送であったことから、大量輸送が可能な河川交通が、内陸部における輸送手段の主役でした。上三川町では、東部に流れる鬼怒川が江戸時代を通じて重要な輸送路でした。しかし、江戸時代末になると社会不安から農村が疲弊



このような船を利用し鬼怒川では物が運ばれました
【写真：真岡市石法寺河岸】

してしまい、鬼怒川の河川交通も衰退してしまいます。しかし、明治時代に入り、殖産興業政策が推し進められると再び活発化しました。

上三川町には江戸時代以来、三本木と東蓼沼に河岸が置かれ、農産物や酒・縄・薪炭などが東京方面に送られ、逆に肥料や塩、雑貨類などが運ばれました。さて、東蓼沼と三本木の河岸がどれくらいの規模であったかという、明治13年の資料で、問屋はそれぞれ1軒、東蓼沼河岸は長さ5間

以上の大船を1艘、5間以下の小船を5艘所有し、一方の三本木河岸は大船2艘、小船5艘を所有していました。周辺の河岸と比較すると、最も栄えていた上阿久津河岸で、大小131艘の船を所有していたのに比較すると、必ずしも大規模とはいえませんが、地域の物流の大動脈としてなくてはならないものでした。

これらの河岸は、明治18年に大宮・宇都宮間に鉄道が開通すると、物流の主役の座を奪われ急速に衰退してしまいます。人々で賑わった河岸は、現在では跡すらわかりません。夏に水遊びをする人々で賑わう鬼怒川を、多くの船が行きかかったなど今では想像できませんが、わずか120年前の鬼怒川では日常的に見られた風景でした。

たね俳句

オリンピック終えて静かな秋を知る 浜野 正男

今咲ける朝顔に在る折目かな 大八木喜重郎

運動会確めて見る吾が鼓動 柳田 石村

金と銀入替え難し一位の実 伊沢 静香

独居の部屋に珍客ちちる虫 浜野マス子

床板の素足に過ぐる秋の風 阿部 信子

熔岩原やばはらの地蔵へ急ぐ赤蜻蛉 野沢 花枝

燈下親し吾の一部や老眼鏡 上野キミエ

さわやかに揺れる清楚なそばの花 石崎 節子

筑波嶺の裾見通せる稲百里 蓬田 四方

